新　刊

□清水建美（著）•梅林正芳（図）：**日本草本植物根系図説** 262 pp. 1995. 平凡社. ￥15,000.

植物の地下部を描いたまとまった図鑑としては，樹木根系図説（刈住）がわが国唯一のもので，外国にも例は少ないという．日本植物生態図鑑（沼田・浅野）では，地下部も図鑑の対象にとり込む試みがなされている．分類学は植物のあらゆる形質を対象としてタクソンを論ずるはずであるが，花や葉に注意が集中し，地下部はおろそかにされがちである．そのわけは，直接に目をひかないこと，採集が困難なこと，構成が複雑でつかみどころがないこと，研究の困難さに対して成果のあがりにくさが予測されて敬遠されることなどだろう．頁を開けば，あきれるばかりの描画の几帳面さに，ため息がでる．もっとも，ハンゴンソウのように，もう少し間引いて描く方がわかり易いだろうにと思うものもある．これらの図は表記の梅林氏の他に，川窪伸光氏の作品が多数含まれているとのことである．それより前に，描画の元となった資料の掘り出しに，どんなに多くの労力が費やされたかは，想像の外である．採集のとき「根も大切だから…」とひっこ抜くのとは異なり，細根の端まですべてを掘り出さねばならないからである．地面を掘る前に，根がどこまで拡がっているかを予測するには，かなりの修練を要するだろう．こういう作業を学生に課した清水氏の執念と，それに応えた学生諸氏の熱意に，敬意を表する．本書には213種類の草本植物の根系がほぼ実大で図示され，それぞれに解説が付され，各部分の名称が和•英文で示されている．試料の採集地，採集年月日も付記されている．英文名称についてはKew植物園の分類学者らに意見を求めたが，人により一致しない場合もあったという．冒頭20頁にわたって，根系の形態論と分類群による特徴，さらに同定学や系統学への適用の可能性が述べられている．地下部にも種特異性があるというのが，著者の見解である．その一例として，スズムシバナと近年識別されるようになったユキミバナがある．巻末には根系による種の検索表，用語解説，索引がある．最も目立たぬ分野で新しい地平を開拓した著者らと，それを支援した多くの人たちに声援を送りたい．

（金井弘夫）

□万谷幸男（編）：**植物学名大辞典** B5版. 420 pp. 1995. 植物学名大辞典刊行会. ￥12,000（送料￥450）.

編者は趣味の多肉植物愛好家で，学名の意味に興味をもち，植物全般の小名の意味を多くの文献から書きとめた資料を遺して，1984年亡くなられた．本書は知人有志がその努力が無になるのを惜しんで，遺品を整理し，出資刊行したものである．小名をabc順に並べ，その意味を解説してある．解説は原典からの引用で，とくに新しい解釈などは含まれていないようだが，採録件数はざっと数えて23,000語である．この数は牧野・清水の植物学名辞典が約11,000語であることを思えば，故人の努力のほどが察せられる．学名を調べたり発表したりするときの参考となるだろう．頒布については下記に連絡すれば，代金後納で発送するとのことである．〒661 尼崎市[redacted]

（金井弘夫）

□荻原博光，山本幸憲（解説），伊沢正名（写真）：**日本変形菌類図鑑** B 5版 164 pp. 1995. 平凡社. ￥3,800（税込み）.

“生物多様性”，すなわちこの地球上における生物学的変異の広がりの問題は，1990年代の科学と政治の政策テーマとして世界的に注目されている．多様性，特にライフスタイルの多様度の点では，変形菌類（粘菌類）はその代表選手であり，形態形成，生理学，細胞学などの生物学的研究の標的になっている所以である．形態形成，生理学，細胞学などの生物学的研究の標的になっている所以である．本書の帯のキャッチフレーズ「あるときはアメーバ，あるときはキノコ」は，この奇妙な生物の多様性の一端を的確に示している．従来変形菌類は，分類体系上菌類界の仲間として位置づけるのが一般的であったが，最近の18S rDNAに基づく系統解析は，この仲間が菌類ではなしに，原生生物界もしくは原生動物界に帰属する疑似菌